

預り人 村井藤十郎へ 中村八郎左衛門  
 前田 主膳へ 仁岸 權佐  
 長室臣 渡邊 源兵衛へ 伊久留 八之丞  
 同上 小林六右衛門へ 飯坂 源左衛門  
 同上 長 伊左衛門へ 八郎左衛門子  
 中村 吉十郎  
 同次男 土屋 興十郎

此外幼稚の子供は、宇留知平八宅中に集置。  
 此輩は越中五箇山へ流刑に被處。

一、連頼嫡子左兵衛事は、徒黨人等を押留、裁判のいたし  
 様もあるべきの所、却て條數書を取次せしは、父命を嘲に  
 似たり。長家相續すべき器に非ずとて隠居せしめ、其子長  
 松丸を以て連頼が名跡と定めらる。先是萬治年中、堀田上  
 野介家老深美縫殿助といふもの、浪人にてありけり。此者  
 武功ある覺のものたり。老年といへども子右京あり、侯家に  
 召置かれ可然と、保科公正之口入にて賀州へ來り仕たり。此  
 右京へ小幡宮内が女を以て妻はせ候様に仰下り、婚姻の所  
 其婦人早世しぬ。寺西庄右衛門後家、いまだ年わかつて長  
 家へ引取置ければ、是を以て右京が後室とすべきよし命あ

りて、やがて令再嫁、互に一門中悅あへり。

一、寛文十一年三月二十四日連頼卒す。同年十一月六日、  
 江戸より長家相續の御折紙到來、嫡孫長松八歳にて九郎左  
 衛門と改稱せしめ、三萬三千石を賜り、弟竹松へ別に千石  
 を賜ふ。家老長伊左衛門・加藤采女・高柳馬左衛門・小林平  
 左衛門・堀内彌平等は、家久しく舊功の者に候故、與力分と  
 の命下る。連頼の後室は正壽院と名付、當九郎左衛門より  
 千石を以て、茶代と號し孝養す。延寶三年十二月十九日、  
 九郎左衛門鎧の着初師範として、岡嶋兵庫を頼み招請あ  
 り。兵庫辭して云。長家の舊臣小林平左衛門は、代々無隱  
 武功の士たり。是にしくものあらじ。我等も見請可申とて、  
 則平左衛門奉之、黒瀧が首撃たる來國次の脇指を奉る。九  
 郎左衛門時連と名乗り、一門嘉會ありしと也。時連、後稱大隅  
守時連是也。

以上 寛文七年丁未。長連頼因愛妾事家事大亂。與子左  
 兵衛好連不相善。家臣等互相黨與。於是除舊封鹿  
 島半郡。別給三萬三千石。長綱左兵衛。不齒鄉黨  
 稱一玄。立黨之臣八人皆賜死。

### 可觀小説卷十

一、少女十四歳の作詩

生耽文字性情孤。樂水樂山是我徒。

自笑少年狂更甚。醉花嘯月在東湖。

此一絶は、兩國橋際に餅を賣て世を渡る人の女子、今茲十  
 四歳なる者の作といふ。其師は津輕出羽守家臣大場貞右衛  
 門といふよし。誠に女子の口氣に非ず。或云、醉嘯の二字  
 如何、春花秋月に作らば可也と。余謂く、清風明月も可な  
 らん。

一、不破元澄夢想の歌

去年冬、木下順菴門弟姓名御尋有之、順菴子息平三郎二百五  
名より、陪臣共に四五輩書上被申候處、高倉屋敷にて毎日  
 講談有之様に、若年寄衆を以て被仰渡候。但陪臣は差除可

申旨に付、木下平三郎・室新助・服部藤九郎三番に講談被仰  
 渡候。十一月二日より相始候。平三郎大學、新助論語、藤  
 九郎孟子と輪講也。旗本・陪臣以下の無權、同日に皆罷出  
 候。但聽聞の席を隔て、毎日四時より八時迄にて、朔・望・

二十八日及佳節の分除之候。高倉屋敷といふは治容子河岸  
 にて、林大學頭隣家、むかし公家の内高倉何某下向の時、旅  
 にて講談被仰付、近思錄被講候旨。今茲庚子二月七日の曉、  
 夢に醫師不破元澄來告て云。此歌一首よみ侍りぬ、鳩巢先  
 生へ奉りなん。但足下より傳致し給へといひて夢覺ぬ。そ  
 の歌に云。

人の呼名にかなひてや武士の後の名にあふ高倉の宿  
 愚常夢寐顛倒自愧而已。程子有言云。凡事有兆朕。入夢者  
 却無害。捨此皆是妄動。如某此夢。抑有兆朕而入來者耶。又  
 將顛倒妄動者耶。可異。姑記以俟識者耳。二月七日禮幹識。  
 御別紙御夢記被遣、御厚志不淺忝存候。是は思夢と見え申  
 候。いかにとなれば老夫事を常に被懸御心候故、夢にもあ  
 らはれ候か。妻承候て是は吉夢とてよろこび申候。昨日も  
 愛羊愛禮の章にて、少費を惜み候て禮の方を破り申事を、  
 隨分とき申候。責て時人の聽をおどろかし度存事に候。萬  
 々期貴面之時候。以上。

二月八日

鳩巢